



ラテンアメリカ文化事典編集委員会 編
『ラテンアメリカ文化事典』

丸善出版 2021年 780ページ

ISBN 978-4-621-30585-0

本書は、世界の特定の地域を取り上げて、文化を中心に広く深く解説する文化事典シリーズのラテンアメリカ版である。文化事典という名前がついているものの、日本におけるラテンアメリカ研究の知見を、政治・経済・社会の側面も含めて包括的に収録している。

類書と比べて本書にはいくつかの特徴がある。ひとつめは、50音順ではなく、それぞれの分野ごとに20程度の項目を選んで掲載している点である。たとえば、文明・文化遺産の分野では、環境、生業、交易、儀礼行為、社会組織などを取り上げている。これらの項目をみると、ラテンアメリカの文明を理解するためには何に注目する必要があるのかがわかる。歴史の分野では、植民地の建設から独立に向けた改革、そして共和国の設立へと、時代の流れが簡潔につかめる。政治の分野では、軍事政権の成立やその後の民主化、21世紀初めの左派政権の誕生まで、それぞれの時代を理解するうえでカギとなる項目を概観できる。読者は、関心のある分野の項目にひとつお目をとおすことで、その分野の重要な概念や視点、そして変化を理解でき、最新の研究成果も把握することができる。

ふたつめの特徴は、ラテンアメリカの今日の人々の暮らしに注目している点である。アンデスやアマゾンに住む人々の生業、各地の食文化や民芸品、新しい宗教や流行の音楽、スポーツならサッカーはもちろんのこと、ルチャ・リブレ（プロレス）やカポエイラなど。人々の営みや楽しみに関する項目を取り上げ、ラテンアメリカの日常の光景を丁寧に描いている。

編集上の工夫も多い。1項目を見開き2ページで簡潔に解説している。参考文献を挙げ、掘り下げて調べる手がかりを提供している。項目名索引、事項索引、人名索引の3つの索引を設け、読者がさまざまな視点から目指す情報を探せるようにしている。巻末には、各国の概要を説明する各国情報と、この地域全体の文明が一覧できる年表を付録として収録している。

本書を手にして、日本におけるラテンアメリカ研究が多様な分野にわたっており、それぞれにおいて多くの知見が蓄積されていることを改めて認識した。そして、研究対象となる分野がますます広がりつつあることもわかった。

紹介者は社会科学分野の研究をしているが、人文科学分野の項目のなかにも、政治や経済について研究するうえで役立つ視点がいくつもあることに気がついた。近年、研究領域の専門化が進んでいるなかで、学際的な地域研究の醍醐味を味わえる1冊となっている。

清水達也（しみず・たつや／アジア経済研究所）